

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：34309

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14273

研究課題名(和文) 学生アスリートを対象としたライティング学習支援モデルの構築

研究課題名(英文) Building a writing learning support model for student athletes

研究代表者

多田 泰紘 (Tada, Yasuhiro)

京都橘大学・経営学部・専任講師

研究者番号：40813663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、スポーツ推薦入試等を経て入学した学生(学生アスリート)を対象としたアカデミック・ライティングに関する学習支援モデルを構築した。まず、学生アスリートの学習特性を明らかにした。その結果、学生アスリートは指導者と双方向でのやり取りを行いながら課題に取り組む傾向がみられた。さらに、大学の講義等で求められる論証型レポート執筆の正課外講座と個別指導を行うモデルを開発・実施し、その効果を評価した。その結果、(1)ライティング能力の向上、(2)学習内容の定着と大学における文章作成課題への活用、(3)自身のライティング力についての振り返りや自身の知識・技術の向上といった行動が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高等教育のユニバーサル化と入試形態の多様化の中で、知識や技術に関する背景、学習時間・場所が一般の学生と異なる学習者も多く存在する。学生アスリートはこのような特徴を持つ最大規模の学生グループである。彼らは体育会等のクラブ(チーム)の活動に参加しながら、在籍する大学・学部のカリキュラムを受講している。しかしながら、彼らの知識や技術に関する背景、学習環境に即したライティング支援は十分に行われてこなかった。本研究の完成によって、学生アスリートの学習特性に基づく学習支援プログラムを確立し、公開することができた。これは、今後の学生スリーの学習支援に寄与するものである。

研究成果の概要(英文)：In this study, a learning support model for academic writing was developed for students who entered the school through sports recommendation entrance examinations (student-athletes). First, the learning characteristics of student-athletes were identified. The results showed that student-athletes tended to work on tasks while interacting actively with their instructors. Furthermore, a model was developed and implemented that provided both a formal out-of-class course in argumentative report writing required in university lectures and other courses, as well as individual tutorials. The effectiveness of the model was evaluated, and the following behaviors were observed: (1) improvement of writing skills, (2) retention of learning content and its application to writing assignments at university, and (3) reflection on one's own writing skills and enhancement of one's knowledge and abilities.

研究分野：高等教育

キーワード：学習支援 アカデミックライティング 学生アスリート

1. 研究開始当初の背景

アカデミック・ライティングの指導および学習支援は、多くの高等教育機関で行われており、その理論と実践に関する知見が蓄積されてきた^[1]。近年では授業外での多様な支援体制の構築が重要視されており、学習意識や動機の向上を目的としたグループでのレポート作成や発表を行うアクティブラーニング型の指導方法が注目を集めていた^[2]。海外の高等教育機関、特に北米では、学生アスリート(スポーツ推薦入試など、高等学校までの運動歴を考慮されて入学した学生)を対象とした学習支援に関する議論が活発に行われており、アカデミック・ライティングを含む学習支援プログラムの実践研究が盛んに行われていた^[3]。一方、日本では学生アスリートに対する特別な学習支援の必要性が指摘されていたものの、アカデミック・ライティングに関する支援やその実践研究はほとんど行われていなかった^[4]。また、現在のアカデミック・ライティングに関する理論と実践は全学的な取り組みが主流であり、学生アスリート個々のニーズへの対応が課題であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、スポーツ推薦入試などを経て大学へ進学した学生アスリートを対象に、アカデミック・ライティングに関する意識やこれまでの学習経験、現在の学習環境を明らかにし、そこから導出された学生アスリート特有のニーズに基づくライティング学習支援プログラムを開発することであった。

具体的には、関西大学スポーツ・フロンティア入試入学生(SF入学生)の1年生を対象に、高等学校卒業までのライティングに関する学習経験、ライティングに対する意識、授業外学習場所・時間などについて調査を行った。この調査結果を基に、授業外セミナー、学習相談、自習用教材を組み合わせたライティング学習支援プログラムを開発し、その効果を検証した。

本研究の完成により、SF入学生をモデルケースとした学習支援プログラムの創出が期待された。さらに、他大学の学生アスリートにも対象を広げ、実効性と応用力の高い学習支援プログラムの創出を目指した。

3. 研究の方法

本研究では、関西大学SF入学生をモデルとして、学生アスリートのライティング学習における課題とニーズの把握、およびライティング学習支援プログラムの提案を行った。

(1) 学生アスリートのアカデミック・ライティングに関する意識や学習アプローチの調査

SF入学生1年生(各年度約110名)を対象に、大学入学時のライティングに関する学習経験、その内容、ライティングに対する意識や学習動機、学習に対する取り組み方についてアンケート調査を実施した。

(2) ライティング学習支援プログラムの開発と評価

授業外講座、ライティングセンター(WRC)による学習相談、自律学習用の資料・教材開発を組み合わせたライティング学習支援プログラム(以下プログラム)を開発した。平成29年度にSF入学生を対象として実施したプログラムをプロトモデルとして用い、(1)より抽出したSF入学生の課題や学習状況に応じた修正を加えた。これらプログラムに参加したSF入学生を対象としたアンケート調査や半構造化インタビュー、講座内でのルーブリック評価などを用いて多面的に評価を行った。効果検証の結果を基に、プログラムの内容に修正を加えた。

4. 研究成果

学生アスリートのライティングに対する意識や学習アプローチを調査した結果、学生アスリートは、大学入学までの学習経験および大学入学後のスポーツ活動と学習の両立に対する不安や課題を抱えていた。また、個別に目標や計画を立てて学習を進めるより、指導者と双方向でのやり取りを行いながら課題に取り組む学習に適応性を有していた^[5]。

ライティング学習支援プログラムを開発、評価したところ、学生アスリートは授業外講習会等の時間や空間を共有した双方向での指導をベースに、レポート執筆等の具体的な課題に取り組むことで、ライティング能力を向上させること、学習内容の定着と大学における文章作成課題への活用、自身のライティング力についての振り返りや自身の知識・技術の向上といった行動が見られるなど、ライティング学習に対する高次の転移が示唆された^[6]。以上より、正課外講座と個別指導およびレポート作成課題を用いたアカデミック・ライティングに関する学習支援モデルの効果が確認された。

【参考文献】

- [1] 井下千以子 (2010) 「ライティング教育における多様な学習支援体制 Writing Across the Curriculum の先進的事例から」大学教育学会誌 32 巻 2 号, pp 37-38
- [2] 由井恭子 (2016) 「大正大学における文章表現科目『学びの基礎技法 B』概要」大正大学教育開発推進センター年報 創刊号, pp 16-19
- [3] 伊東克 (2015) 「カレッジスポーツシンポジウム」全国大学体育連合主催, シンポジウム発表資料
- [4] 全国大学体育連合 (2015) 「スポーツ・クラブ統括組織と学習支援・キャリア支援に関する調査報告」
- [5] 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務 (2021) 「学生アスリート 1 年生の学習動機とライティング学習支援の効果」関西大学高等教育研究 12 巻, pp 37-47
- [6] 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務 (2023) 「学生アスリートを対象としたライティング学習支援の効果 1 年次に受けた学習支援が 2 年次の学習に及ぼす影響」大学教育学会誌 45 巻 1 号, pp 180-190

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務	4. 巻 45, 1
2. 論文標題 学生アスリートを対象としたライティング学習支援の効果 1年次に受けた学習支援が2年次の学習に及ぼす影響	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 180-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務	4. 巻 12
2. 論文標題 学生アスリート 1年生の学習動機とライティング学習支援の効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浅賀圭祐・多田泰紘	4. 巻 28
2. 論文標題 成績干渉を回避するための正課外チュータリングの方法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 -	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 多田泰紘・岩崎千晶	4. 巻 12
2. 論文標題 ライティングセンターに蓄積された相談カルテの分析と 共有が学習支援へ与える効果 初年次学生の個別相談の傾向と学生個々の状況の把握	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 初年次教育学会誌	6. 最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務	4. 巻 11
2. 論文標題 正課外講習会と個別指導が学生アスリート初年次生の文書作成能力に及ぼす効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務
2. 発表標題 ライティングセンターにおける課題解決の推移 スポーツ推薦入試入学生のレポート課題を例に
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務
2. 発表標題 ライティングセンターにおける課題解決の推移 スポーツ推薦入試入学生のレポート課題を例に
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務
2. 発表標題 学生アスリートを対象とした正課外ライティング講義における対面指導と遠隔指導の効果
3. 学会等名 日本教育工学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務
2. 発表標題 継続的なライティング学習支援の効果 学生アスリート 1年生の文書作成能力の成長
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務
2. 発表標題 初年次学生アスリートを対象としたライティング学習支援プログラムによる文書作成能力と意識の変化
3. 学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ライティングセンターにおける課題解決の推移 スポーツ推薦入試入学生のレポート課題を例に
2. 発表標題 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------